

自宅 空いた場所開放

家族が減ってきた空き部屋や、改築によって生まれたスペースを、カフェやギャラリなどとして、近隣の住民や知人らに開放する人が目立っている。多世代の交流拠点に発展するケースもあり、地域の活性化にもつながっている。「住み開き」と呼ばれる。新たな生活スタイルとして提案する動きも広がってきた。

(島香奈恵)



大阪市中央区のオフィス街。6階建て雑居ビルの最上階に、両親らと暮らす造園プランナーの山内美陽子さん(36)は、玄関近くの約10畳の部屋と、屋上部分を「谷町空庭」として開放している。

山内さんは7年前、屋上に小さな庭園を作り、知人らを招いては「カフェ」としてお茶をふるまっていた。次第に評判となり、訪れる人が増えた。6年前には祖母が転居したため、空いた約10畳の和室

を板張りに改装した。

演奏会やヨガのレッスン、パーティーなど、使われ方は様々。使用料は維持費として1人500円程度だ。

山内さんは「自宅にいなながら、たくさんの人との出会いがあり、刺激を受けている。相手をもてなそうとか、部屋をきれいにしようとか気負わず、ありのままの姿を見せる

ことで、集まって来る人も自然体でいられる」と話す。

同市西淀川区の大阪経済法科大名誉教授の沢勲さん(72)は2年ほど前から、自宅を新築した際に使わなくなった家屋を「洞窟ハウス」として開放している。

長年洞窟の研究に取り組み、世界300か所を訪ねた経験をもとに、紙粘土や雑貨



山内さん(右後ろ)の自宅屋上のミニ庭園に集うグループ。「ビルの谷間の憩いの場」となっている(大阪市内で)

演奏会、ミニ資料館…気軽に集う

で鍾乳洞や地底湖などを手作り。写真や資料も掲げ、学びと遊びのスポットになっている。沢さんは「自宅なので博物館よりも身近で、興味を持ってもらえる。子どもらに夢を与えたい」と話している。

また、青森県では、芝居好きの公務員が自宅1階を改装し、定期的にミニ公演を開いている。大阪市には蔵書を並べた自宅図書館などもある。

文化芸術関連の企画制作を行う民間団体「事編」(大阪市)代表で、アーティストのアサダワタルさん(31)は、こうした自宅開放を「住み開き」と名付け、広く紹介している。

「公共の場でもサービースを受ける場でもない。私的な領域だからこそ、相手との距離が近く、節度ある会話を楽しめる。住み開きは、近所付き合いが濃密だった昔への郷愁ではなく、今風な付き合い方」と話す。

リクルートが2007年に

まとめた団塊世代への調査結果(複数回答)では、住まいについて、30%の人が「趣味や遊びのための活動拠点、基点」、15%が「友人や仲間を招いて交遊する場」とそれぞれ答えており、開放的なイメージを持つ人は少なくない。

小さな「公共空間」

まちづくりに詳しい愛知産業大学大学院造形学研究科教授の延藤安弘さん「写真」は「財政難から自治体の公共サービスが行き詰まる中、自宅を活用した交流の場は、地域の多様なニーズにこたえる「小さな公共空間」として期待できる。社会に貢献したいという思いだけでは長続きしないので、まずは自分が楽しめる空間にすることが大事だ」と話している。



自治体の公共サービスが行き詰まる中、自宅を活用した交流の場は、地域の多様なニーズにこたえる「小さな公共空間」として期待できる。